

研究テーマ

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的に関わる子どもの育成～

I テーマ設定の理由

今回の東日本大震災による被害の大きさと原子力発電所による事故は、日本の社会を見直すべく課題がたくさんあることに改めて気づかされた。地球温暖化やエネルギー問題、自然破壊など今日の環境問題を解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を迫及することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みを理解し、環境に配慮した仕組みに社会を変革していく努力を行うことが大切である。私たち一人ひとりが、問題解決のために何をしなくてはならないのか考え、実行していくことが必要とされている。

文部科学省では環境教育について「環境問題とは、環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間活動と環境とのかかわりについて総合的な理解と認識の上にならなくて、環境の保全に配慮した望ましい働きかけのできる技能や思考力、判断力を身につけ、持続可能な社会の構築を目指してよりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境へ責任ある行動がとることができる態度を育成する。」ことと定義している。（文部省『環境教育指導資料』2006年）

小学校における環境教育では子どもが身近な環境に意欲的にかかわり、問題を見出し、考え判断し、よりよい環境づくりや環境の保全に配慮した望ましい行動がとれる態度を育てることを目指す。生じている問題への「気づき」「知識」「問題解決への実行力」を育て、最終的には自分達のライフスタイルを見直す力量をもつことが期待されている。

環境教育や環境学習の機会を充実し、環境に対する豊かな感受性と熱意、見識をもつ「人づくり」をめざし、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 環境教育に関する学習会

「原子力発電の問題について」 講師 山崎俊二先生（勝沼授産園施設長）

2 研究授業

(1) 資料を持ち寄っての理論研究・内容の検討・授業資料準備

(2) 研究授業

6年 理科「生き物のくらしと環境」 小川正仁先生（塩山南小）

◎様々な生き物どうしが、「食べる」「食べられる」という関係でつながっていることとその生き物どうしのかかわりの大切さについて理解する。

- ・生き物は食べ物を通してどのようにかかわっているか考える。
- ・ネイチャーゲームを行い、自然の中での生き物どうしの関係を疑似体験する。

1年 生活科「冬をさがそう」 早川博江先生（加納岩小）

◎冬の自然物（木の枝や実など）を使ったゲームに取り組み、身近な自然の様子や季節の変化に気付く。

- ・冬さがしで見つけたもの（檜・スギ・アオキ・ナンテン・ツバキ等の枝や花や実・イラガのまゆなど）を使って、実と枝、花の写真と枝などの仲間集めを行い、仲間だと判断した理由を発表しあう。

3 一人一実践の報告

4 臨地研修

乙女高原に行き、開発による自然への影響を考えたり、植物や生き物についてその名前や特徴について学んだ。

III 研究の成果と課題

1 学習会

東日本大震災を発端に日本社会で大きな問題となっている「原子力発電」について、講師を招いて学習会を行えたことは、環境部会として大きな成果であった。「原子力発電」については、太平洋戦争で原子爆弾を受けて以来、危機感を持っている人々がいて、新聞や映画などで問題にされていたこと、ビキニ水爆、インドの核実験、チェルノブイリの問題など過去の数多くの例を振り返り、原子力の問題について学習できた。

2 研究授業

環境教育は「自然の素晴らしさを子どもたちに感じとらせる」こと「自然への感謝の気持ちを育てる」ことが大切であると考え、実践を進めてきた。現在の児童の実態として、日常の生活の中で山や野原で遊ぶ経験もなく、草花や生き物を観察する機会も少ない。自然体験が豊かであることが、考え方や学習の豊かさにもつながっていくだろうと考える。二本の研究授業では、ネイチャーゲームや観察を通して児童が自然について学んだり考えたりすることができ、部会のテーマにせまることができた。小川先生の実践は全国教研で発表できたので、全国教研の様子を知ることができた。

3 研究会を通して

環境部会の構成メンバーが少ないのにもかかわらず、先生方一人ひとりが部会のテーマに沿った実践を行い発表し合うので、研究会が充実していた。環境教育は生活科や理科、総合的な学習、道徳、家庭科などあらゆる教科で学習する機会があるので、身近な自然体験から社会問題である「公害を含む環境問題」までを教材化することができる。子どもたちに「自然を体験して楽しい授業」から「実態を正しく把握して考えさせる授業」をとおして「自然環境を守る」大切さを学んでほしい。（加藤友子）